

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

個人研究費

2010年度研究成果報告書

研究代表者	所属・職名	氏名
	社会学部・助教(2011年4月1日より、大阪府立大学21世紀科学研究機構エコサイエンス研究所・准教授)	福永 真弓 印
研究課題	漁業資源の増殖事業と「伝承知」: 資源誌の社会学に向けて	
研究期間	2010年度	
研究経費	500千円	

研究の概要(200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと)

本研究の主眼は、社会学的フィールドワークを通じて、漁業資源の増殖事業というきわめて現代的な産業が、地域社会を支える信頼や社会的ネットワークを構成する装置となっていることを明らかにし、地域資源ガバナンスを確立する1つの道筋として、その現代的な意味と可能性を論じることにあつた。そのために、本研究は2つの事例研究を軸とした。いずれの場合も、資源の(再)資源化のダイナミズムにおける、ローカルな知的体系と社会的ネットワークを保持し、継続させる装置(本研究ではこれを「伝承知」と呼ぶ)の所在とそのメカニズムの解明に焦点をあてた。①米国の先住民ユロックのウナギやサケ類の漁業資源について、ユロックが自ら「伝承知」の機能と役割の再構成を行いながら、資源にかかわる政治的意志決定過程における発言権の増大とそれによるガバナンス主体としての正統性の確保と、ガバナンスの実践を行う様子を調査・分析した。②岩手県宮古市の津軽石川流域における、サケ類の漁業資源の増殖事業と漁協による流域管理事業について、「伝承知」が形を変えながらも、その事業の周辺に再構成・配置され、それにより地域資源ガバナンスへの地域社会の積極性が保持される様子を調査・分析する。この作業により、なぜ地域資源ガバナンスの主体に地域社会を据えることが重要なのか、その点についても実証的にあぶりだせた。

キーワード(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 地域資源ガバナンス ] [ 資源誌 ] [ 米国先住民 ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、計画書で当初示した通り、期間内において2つの事例研究を中心におこなった。

先住民ユロック (米国カリフォルニア州とオレゴン州の境、クラマス川河口域に居留地を持つ) ユロックの漁業資源に関して、本研究では、(a) 歴史的な連邦政府と州政府との間でなされてきた各種の取引や裁判の記録を行政文書から掘り起こし、ユロックが政策的意志決定過程から疎外され、漁業権とガバナンスの公的権利を喪失してきた時期、(b) 60年代以降の先住民権運動と漁業権紛争において、その権利を保持する正統性を訴えてきた時期、(c) 70年代以降の環境保護政策の下で、流域保全政策を利用しながら、実質的にも、公的にも漁業権とガバナンスの主体としての正統性を再取得してきた時期の3つにわけた。

特に今回は、最後の(c)に関して、資料と聞き取り調査を通じて、特にサケ類とウナギの増殖事業および漁をめぐって、それらに携わる人びとの間で、協働作業やイベントの共有、経験の物語化とその共有による信頼関係と規範の生成、社会的ネットワークの新たな形成について明らかにできた。

具体的には、90年代に入り、連邦政府や州政府、および社会的ニーズによって流域資源の保全が社会的課題として注目を集めるにつれ、サケは、以前にもまして、ユロックの先住民政府を保持するための、アイデンティティを対外的に示す文化的アイコンとして強調されるようになった。同時に、流域資源の保全そのものが、ユロックにとって重要な産業 (政府や民間団体からの資金確保ができ、保全実現のために、ふ化場やモニタリング要因、事務職などの雇用を生み出す) となる中で、サケにまつわる利権の担保者が再構築され、ユロック内部での力関係の変化がおこった。その変化には、生物学や資源管理学などをおさめ、サケの資源管理と政策決定に直接影響を及ぼす、若手や知識の保持者が大きくかかわっている。

それに伴い、漁の上手さや文化的資源の保持者として尊敬を集めてきた長老筋周辺では、白人によって安易に文化的アイコンに称揚され、また、西欧近代科学の知識が全面的に第一の信頼を集めはじめたサケの資源管理の実情を横目に、文化的アイコンとしてそれまではあまり目立たなかったヤツメウナギが重視され始めた。ヤツメウナギをひっかけるための鉤針が芸術的に装飾され始め (それまでは簡易な味気ない鉤だった)、ヤツメウナギをとるための漁の仕方が、より「伝統的な」漁として語られ始め、同時に、ヤツメウナギにまつわる遊び道具や神話などもあらためて他の生き物よりも明確に語られるようになった。そして、ユロック内部でのガバナンスは、表のサケと、裏のヤツメウナギと、両者が両者を互いに支えあうようなかたちで、敬意、伝承・伝統の正統性、発言権の大きさなどを構築し合って成立している。ヤツメウナギは代表的な例だが、この手の「ずらし」によるオフィシャルなガバナンス以外のガバナンスの確保は、ユロック内部の意思決定過程においてきわめて重要な意味を持っている。

なぜならば、これらの動きによって、相変わらず大きな文化的アイコンであり、経済的な支えであるサケの脇に、i) サケがオフィシャル化することによって薄れてしまった (と当人たちがみなしている) 「ユロックのアイデンティティ」を「裏から」確保し、ii) 流域の資源保全によって、サケもヤツメウナギも守る、という大きな枠組みの中で、結果として自発的な経済社会開発として流域資源保全を「地域社会の中でまわす」ための大きな活力がユロック内部に生み出され続けているからである。

資源管理ガバナンスには必ず、「表」のガバナンス (先住民政府や州政府、連邦政府の権限で行われるオフィシャルなガバナンス過程) のほかに、「ウラ」のガバナンス (長老筋の周辺などに日常の中でおこなわれる、政治的かつ社会的な微細な集団をまとめるためのガバナンス過程) が必要であり、むしろそれがどれだけ豊潤にとりだせるのか、が一つの鍵のように思える。

以上の内容については、既に以下のとおり公表済み・あるいは公表予定である。

- 1) 福永真弓, 「日本の流域資源管理の可能性」, 南山大学社会倫理研究所設立 30 周年記念シンポジウム『だれが環境問題について考えるのか: 環境政策における地域レベル拠点と取り組みの重要性』, 南山大学, 2010 年 5 月 29 日.
- 2) 福永真弓, 「サケとヤツメウナギの有象無象とガバナンス: 〈未完であるがゆえの文脈の豊饒さ〉の持つ社空学的意味」 (仮題), 宮内泰介編『アダプティブ・ガバナンス』 (仮題), 新泉社 (2011 年度発行予定).

**研究成果の概要** (つづき)

また、岩手県宮古市の津軽石川の調査では、同様に社会的フィールドワークを行いながら、地域社会におけるサケの(再)資源化過程の変容、および地域社会の社会的・文化的文脈を内在させた「資源化のまなざし」の履歴の抽出をおこなってきた。そして、そのために特に、以下の調査を中心におこなってきた。当初の予定と若干調査の内容と対象が変わっている。

i) 近世後期から明治維新直前までの、サケガワとしてのサケを生活空間に抱えていた津軽石の地域社会住民による資源化過程と、外部からの商業資本や藩政による権利上での資源化と資源管理のズレについて、歴史文書および先行研究からの資料調査。

ii) 津軽石鮭繁殖保護組合について、地域社会の文化的・社会的文脈を、サケの増殖事業の周辺に再編成している状況を、資源化過程へ着目しながら調査。特に、戦後、増殖事業によるサケ資源の増加と共に、かつてないサケの消費の大衆化がおり、逆説的に人びとの間で「地域資源としてのサケ」が広がると同時に、地域の「伝承知」がその周囲で再編成されていく様子を調査してきた。

その際には、特に、「川の記憶」を中心に調査をおこなった。その結果、調査では、少なくとも戦後のサケマスふ化放流場の整備とその放流数の著しい増減がおこなわれるまでは、地元の人にとってサケは、「年取り魚」として年に1尾食べるかどうかであり、それが「あきるほど」食べられるようになったのはほんの30年ほどのことだということが明確になった。

同時に、「食べる」サカナとしてではなく、水田の用水路に入り込んでいたサケの稚魚たちをおいかけたり、みたりした思い出や、さかのぼる姿、漁に出るムラの衆や、それでもサケで戦中戦後をすくわれてきたがゆえの愛着など、さまざまな側面からのサケの話を抽出することができた。

その変化もまた、増殖事業としての「サケ」業が、他の水産物よりも傑出して、地域の社会的なネットワークや文化的・社会的文脈を、形成し続けながらいることを示す一つの資料でもあった。

今回はさらに、3つ目の調査の焦点として、

iii) 津軽石とほぼ同時期にサケ漁が「増殖事業」化していった閉伊川流域についても、同様に「川の記憶」を中心としながら聞き取りを行った。これは、津軽石のように、地域社会の社会的文脈と経済社会構造が増殖事業の周辺に再編されていったパターンとは異なり、特定の地域社会からは増殖事業が切り離され、広範囲の漁協のおこなう産業として再編されたパターンをみるためである。こちらについてはまだ始まったばかりだが、津軽石川の比較対照することで、より津軽石のほうが明確に事例として整理できるだろうと考えている。

以上、これらの調査については、以下の通り既に成果を公表している。

- 3) 福永真弓, 「断片化した情報を咀嚼する・編む・使う: (生) をつむぐ主体のあいだから見えること」, 『環境・社会システム統合フォーラム』, 海洋研究開発機構, 2010年7月20日。
- 4) 福永真弓, 「サケの増殖事業と〈資源化のまなざし〉のアクチュアリティ」, アダプティブガバナンス研究会, 2010年6月12日。
- 5) 福永真弓, 2010, 「記憶のたゆたう〈場〉としての流域と地域主体の構築: 地域社会型資源管理を「ウラから」支えるもの」『社会と倫理』24: 5-16。

ところで、この岩手県の調査については、2011年3月11日の三陸沖地震津波により、調査地が被災し、その被害ははかりきれない状況にある。インタビュー対象者の多くが被災し、いまだに避難所で生活している方々や、事業の存続が難しい漁業者、また、津軽石川については、サケのふ化放流場が壊滅的な打撃を受けている。

そのような中で、「社会的調査」を継続すること、インタビューをおこなうことは、被災地への支援や、被災者となったインタビュー対象者によりそいながら、じょじょに試みていくよりほかはない。また、被災者の心情を慮ると、あるいは、大きなこの天災について、流域ぜんたいの資源管理やガバナンスを考えていくうえで、学問としての意義やその内実を再考せざるを得ない。筆者は4月に既に現地入りし、被災者を見舞うとともに、何ができるか、微力ながら周囲との協力のもと活動を始めたが、その点についても、この課題と密接に関連しながら行く末を見据えたいと考えていえる。

そのため、現段階では、既に予定していた論文発表を一部取り下げている。その旨だけ、ここに記す。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①雑誌論文

- 1) 福永真弓, 2010, 「記憶のたゆたう〈場〉としての流域と地域主体の構築: 地域社会型資源管理を「ウラから」支えるもの」『社会と倫理』24: 5-16.

②図書

- 2) 福永真弓, 「サケとヤツメウナギの有象無象とガバナンス: 〈未完であるがゆえの文脈の豊饒さ〉の持つ社会学的意味」(仮題), 宮内泰介編『アダプティブ・ガバナンス』(仮題), 新泉社 (2011年度発行予定).
- 3) 福永真弓, 『環境の思想のアクチュアリティ: 倫理と思想のはざままで』(仮題), 頸草書房 (2011年度発行予定).

③シンポジウム・公開講演会など

- 4) 福永真弓, 「日本の流域資源管理の可能性」, 南山大学社会倫理研究所設立30周年記念シンポジウム『だれが環境問題について考えるのか: 環境政策における地域レベル拠点と取り組みの重要性』, 南山大学, 2010年5月29日.
- 5) 福永真弓, 「断片化した情報を咀嚼する・編む・使う: 〈生〉をつむぐ主体のあいだから見えること」, 『環境・社会システム統合フォーラム』, 海洋研究開発機構, 2010年7月20日.
- 6) 福永真弓, 「サケの増殖事業と〈資源化のまなざし〉のアクチュアリティ」, アダプティブガバナンス研究会, 2010年6月12日.